

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 秋 菊姫

秋菊姫氏の博士学位申請論文 *The Making of “Cool Japan” : The Japanese Government’s Cultural and Economic Policies toward the Anime Industry in the Global Age* (「クール・ジャパン」の構築：グローバル時代におけるアニメ産業に対する日本政府の文化・経済政策) は、1990年代以降の日本のコンテンツ政策の展開を、特にアニメに焦点を当てながら、産業政策と文化政策の融合という観点から捉え、これがグローバリゼーションへの対応としてどのように生じていったのかを分析した研究である。

秋氏はこの研究において、歴史資料の分析や関係者への聞き取りを重ね、アニメをめぐる新しい文化・産業政策が登場するまでの歴史的な文脈を明らかにしている。すなわち、まず第1章において、グローバリゼーションの諸理論や文化変容、文化政策、日本文化やアニメのグローバル化をめぐる先行研究についての概観を行った後、第2章では、日本のアニメ産業が初期からどのようにグローバルな市場と結びついてきたのか、またその編成や90年代以降、どのように変化してきたのかについて論じている。第3章と第4章は、本論文の中核的な議論で、第3章では、戦後日本の産業政策と文化政策の展開を追いながら、政府の白書やその他の資料を用いながら、この2つの政策の流れが融合化していくプロセスを描き出している。第4章では、政府のコンテンツ産業振興政策に焦点を当てながら、アニメ／コンテンツをめぐる経済政策と文化政策の融合のプロセスや省庁間での政策のずれと調整、全体としての「調和」の形成、こうした政策レベルの動きに対するアニメ産業の反応などについて考察を展開している。そして、第5章では、このような政府の政策に対するコンテンツ産業側の反応を追い、第6章では、これら全体をグローバリゼーションの中での経済・文化政策の変容という視点から位置づけようと試みている。

論文の審査はこれまで、第一次審査が2008年3月3日に、第二次審査が2008年12月24日と2009年1月26日の2回にわたり、いずれも審査委員全員が出席して行われた。ほぼ完成した論文を前提に進められた第二次審査では、当初、論文の重要性は認められるものの、グローバリゼーションと政府のコンテンツ政策の関係、経済政策と文化政策の関係、政府省庁のコンテンツ政策の間の矛盾の把握などについていくつかの問題点が指摘されたが、1月26日の二回目の審査会では、これらの指摘に関する論述の改善が十分になされ、論文の論理的な構成や分析の明晰さにおいて格段の進歩がみられたことが審査委員全員によって評価され、第二次予備審査を合格と

することを全員一致で決定した。

以上を踏まえて提出された最終論文については、①1960年代からのテレビ産業の中のアニメの生産、欧米でのテレビの普及とそれを基盤とした日本製アニメの国際的流通の時代から、80年代以降のグローバル化への連続と非連続に注目し、グローバリゼーションの流れの中で、欧米におけるアニメの評価や消費がどのように広がっていったのかの歴史的な記述が丁寧になされている点、②グローバリゼーションやアニメに関する欧米の理論を渉猟するだけでなく、現代日本の政策形成や産業の現場に入っていく、著者なりに可能な限りのインタビュー調査や基礎資料の収集を進めて現場のリアリティを捉えようと努力を重ねた点、③グローバリゼーションの中での「日本」のブランド化と、そうした文脈の中での政府レベルでの文化政策と産業政策の融合という見通しで論文全体の論旨を貫いたこと等の点で、本論文は、「コンテンツ」をめぐる政策と産業、グローバルな市場の関係をアクチュアルに捉えた研究としてその意義が評価された。

たしかに本論文の議論はまだ粗削りなところも多く、政府の文化 - 産業政策が及ぼしたかもしれないマイナスの効果や限界、融合化の傾向の中でも残存し続ける産業政策と文化政策の間の矛盾、マス・カルチャーとポピュラー・カルチャーの関係についての概念的把握等について尚考察が不十分なところも散見される。しかしながら、これらの問題点は本論文の学術的な価値から見れば部分的なものか、もしくはその業績をさらなる発展の可能性に結びつける課題であって、本論文全体の独自の学術的価値の高さを損なうものではない。したがって、本審査委員会は、本論文が博士（学際情報学）の学位に相当するものと判断した。